



世近百魔

其日庵主人稿

第十回

庵主は木曾路を兇賊墨染寅藏と共に面白く旅行して碓氷山麓の横川驛にて彼の賊と袂を分ちたる後は恰も孤雁北行の心地にて洒落も興味もあらばこそ道草さへも中々／＼に一直線に東京に向ふたが豫定の通り牛込なる中村宅に落付いたのである乙衛も丁度一昨日の晩景到着したとの事にて其夜相共に食事をなし久々振りの物語りに有りし事共落もなく互み交りの咄を聞き側にある軍人の傲雄主人も其母の六十路に近き叔母刀自も濁る浮世の事共に疎かる程に一入の面白味さへ彌増して或は驚き或は笑ひ更行く鐘も聴洩し其夜の一時過すでも打興じて過せしが其翌日庵主等は乙衛と共に相談し乙衛は銀座三丁目越後屋と云ふに下宿をなし庵主は四谷仲町なる山岡鐵舟先生の家に寄食して世にも稀なる活劇を演ずる事になつたのである（因に曰ふ四谷

仲町と云ふは昔日より一町に三軒丈の家の外なしと云ひ傳へし處なるが其思ひ出多き庵主寄食の舊蹟も今は元皇太子殿下の宮殿となり只電車の停留場に其名を残す計りて山岡先生の面影と共に消果て御所の前庭となり数箇のアーク燈のみ空しく暗に誇つて居る庵主は時々子女を伴ひ四谷見附より此邊を散策して低徊舊事を思ひ出す事がある一庵主乙衛兩人が此の如く離散する事になつたのは元々此軍人中村の宅は陸軍中尉の貧乏暮しの上家も八疊一間に長四疊次に三疊の勝手に臺所切りと云ふよふな狭まい所に餘儀なき事より中村氏が妻帯をせねばならぬ事になり殊に庵主等兩人が世に志す事業と云ふは親兄弟にも明し得ぬ怨累なる藩閥が世を戕ふを憎むより隙に乘じて存分の仇をなさんづ決心なれば何時かは通れぬ縲綆の禍難に捲添へ掛けん事ソモ豫めの注意にて扱こそ居所を撰ぶのである抑此山岡先生と云ふは

彼水滸傳の玉麒麟盧俊義にも比すべき豪俠であつて其徳は及時雨宋江明も及ばざるの人である其上武藝は眞影無念流の奥儀を極め學は禪儒縱横の經典に通じ人を見る事明かにして寡言の警箴常に人の肺腑を貫く庵主が一度贊を其下風に執るや指導訓戒に至らざるなく書に依つて武義百般の妙理を説き劍に乗じて智徳圓滿の深操を教ゆ況や此の迷悟一場の夢界に解法正覺の示現を説いて遽かに天風の寒きを感じしめたるの大智大師である庵主は此師壇に薰蒸せられて益々人世に向つて救護すべきの一大慘事を知得したのである。

時は丁度明治十四年の初めてであつて四月には農商務省を置き引續き北海道開拓使官有物拂下事件に對し激昂の聲全國に喧囂す此時に當り久しく郷里高知に隱忍し數多の同志を扶養して負嵎の勢をなしたる板垣退助は奮然起つて全國を遊説し北年十月二十九日新に自由黨の結黨式を東京に擧げた此月の十一日には 天皇勅を發して明治二十三年を期して國會を開設すべしと天下に告げ玉ひたるより其率先政黨たる自由黨の勢は實に隆々たるものであつた引續き大隈重信は嚶鳴社と東洋道義會とを合同して立憲改進黨と云ふを組織し翌十五年三月十六日結黨式を同じく東京に擧げた此と同時に九州各政社は一呵合同の實を擧げ其牛耳を執るものは

頭山滿、山田武甫、松田正久、長谷場純孝等と傳へられた又福地源一郎、水野寅次郎、丸山作樂等は立憲帝政黨なるものを組織して同年三月十八日に其綱領を公布した此等は總てズ一ツと後の事であるが天下は此の如き氣運の時即ち十四年の四月の始めに庵主等は東京に來たので有るから恰も天下の有志雲集の初期に投合したのである夫が爲めに所有人物とも日暮に交通したから其當世人傑の意氣と所説とは大略涉獵し盡したのである而して退いて庵主已に於ける考への結論はドウであつたかと云へば各黨派の議論に悉く不同意であつた曰く「自己的名利の發狂者斗りて國家的に本氣な奴が一匹も居らぬ」と斷定した

第一自由と幸福と立憲政體とを商品として賣聲高く觸れ廻り其己れの不平と不遇と名利とに満足な代價を得んとする者斗りてあつて其人格と根性とは事實的國利民福に距離の遠いもの斗である

第二自分の獨力で物を考へたり實行をする力がなく根性の不確實な一部の人間斗りを大勢集めて一時に吶喊の聲を擧げて優勢者を威嚇しよふと云ふ未練至極の奴原の集合體であると見極めた第三此んな奴等は元々品位と廉恥とを基礎とした人間でないから

位置を得たり勢力を得たりする
と直ぐに志操が稀薄になり叛反
染た事や掠奪の間敷事を何とも
思はぬよふになるものである

とコウ思ふた故此通りの説を或日竊
かに山岡先生に咄した所が先生曰く
「ムウ夫は其通りだ俺もソウ思ふ併
しソウ云ふ事に氣の付く貴様のよう
な奴は元々唯心定力に身體を支配さ
れて居るから一人で物を考へて一人
で人殺をし一人て腹を切つて死ぬよ
ふな事を爲るものだ夫は昔日から歴
史上チャンと極つた事實である夫も
又好からふよ但し此逆でも思ふた程
の効力は世中にないものであるマア
貴様位の間では其位の事て死ぬの
も相當であらふ去りながら一生に二
度と出来ぬ事を實行する前にはよく
何事も考へては置くものじやぞ」と
云はれたには庵主一寸ギョツとした
夫から乙衛の宿にも行つて此事を咄
したら乙衛は暫く沈黙して満面に充
血させて「大哥御互はマダ人間一人
前の仕事をするのは駄目か知らん
と云ふから庵主は「馬鹿を云ふなア
ノ山岡と云ふ先生はアンナ事を云ふ
爺父さんて夫以上實行的の事に豪い
と敬服をする必要はない敬服する事
だけ敬服したら夫れでよい胡椒は辛
い丈けが能て砂糖は甘い丈けが能てあ
るアノ先生が奇警を云ふて青年を訓
ゆるが能なれば我とは人殺でも何で
も構はぬ實行し得る丈けが能て好い

てはないか一體貴様は一つ敬服する
事があれば何事にも一束に敬服す
るから間違が起るアノ先生の警句に

いて云ふて聞かせた是が庵主が天性
の根性が悪い處である乙衛は「成程
夫もソうだなあ」と云ふたコノ男は



は儘かに敬服したから夫れ丈けには
飽迄敬意を拂ふて此方も一つアノ爺
父さんを敬服するよふな事を仕様
とナセ思はぬか」とウンと横車を挽

飽迄性質の單純な正直者である
夫から一方政府の方はドウかと思れ
ば今年十月に大隈重信の辭職以來政
府は總ての異分子を排除し純然たる

薩長人のみを以て新政府を組織し熱
心に其基礎を鞏固にした爾後十七年
迄の間に伊藤博文は憲法制度取調べ
を命ぜられて歐羅巴に赴き翌年歸朝
して制度取調局を宮内省に置き自ら
憲法制定と諸制度起草の任に當り尋
て華族令を發して舊藩主又は文武の
功臣を華族に列して爵位を授られ政
府の根柢は漸次に確固になつて來た
から彼等は眼中更らに政黨を視ぬ態
度となつた之に反して政黨の方は常
に規律や節制を誤り遂に自由黨は十
七年十月改進黨も其十二月を以て各
其首領を失ひ一時に勃興した諸政黨
も漸次崩壊して來たのであるから庵
主は其己れの蔑視した豫想豫言の適
申したのを愉快に思ふて乙衛に向つ
ても大ひに誇つた事があつた是も又
ズツト後の咄である元來コンな政黨
など云ふものは燈火に群がる夏の
蟲の如く國家の歴史の中に一粒立を
する男の爲る事てはない庵主は此年
の四月十七日に芝の金杉まで用事が
あつて晩の七時頃四谷仲町を出掛け
て赤阪の山王下に来ると山に這入る
橋向ふの暗い處に何かアアアと人
の闘ふ音がする其頃アノ邊はまだ溜
池の大溝がズツとあつて人家も疎
らであつたから人通りも少ない庵主
は何事であらふと橋を渡つて行て見
たら一人の男を二人の男が散々に毆
打して一人の男は大地に打倒されて
居るのを二人の男は踏やら蹴やらし

て居るから庵主は見兼ねて「ライ待
て」と云ふたら應援者でも来たかと
思ひ「何ヲ」と云様直に棒を揮ふて庵
主の肩先を打つたから仕方なく直ぐ
に引外して一人の脾腹を蹴りヒョロ
めく所を揺落し後から飛付く一人を
身を沈めて後飛に外し足を掛けて突
倒し起上る所を霞打に顔面を打つて
突倒ほし直ぐに倒れて居た負傷者を
引擔いて橋を渡つて溜池通りの往來
に出で一丁斗り逃げたら空車が一輛
来たから夫に其男を乗せ庵主は後を
押して紀伊の國阪を押上げて仲町の
山岡邸に歸り庵主の部屋に當て、あ
る門長屋の一室に入れ其男が頭に薄
傷を負ふて血混れになつて居るのを
水にて洗ひ布切を裂いて繻帶をして
其所に寝かした彼は蒼りに感謝して
事件の顛末を咄した夫は「コトである
彼は岡山縣の田舎の者で藤田善友
と云ふ二十一歳の青年で郷里を飛
出して東京に遊學中自由黨の群に
入り所々の演說會などにて反對者
の演舌の妨害掛りなどを爲て居た
元來此男は正直者で新聞や演說
に挑發されて政府官憲の横暴を憤
り終に學業も廢して壯士の群に入
つて居つたが其壯士等より種々の
惡道に誘拐され押借り喰倒し言掛
り亂暴果ては掃拂位までは共に遣
つたらしいが國元の老母が死亡の
通知を得て俄かに良心の呵責に耐
へず友達で共有物の様にして持つ

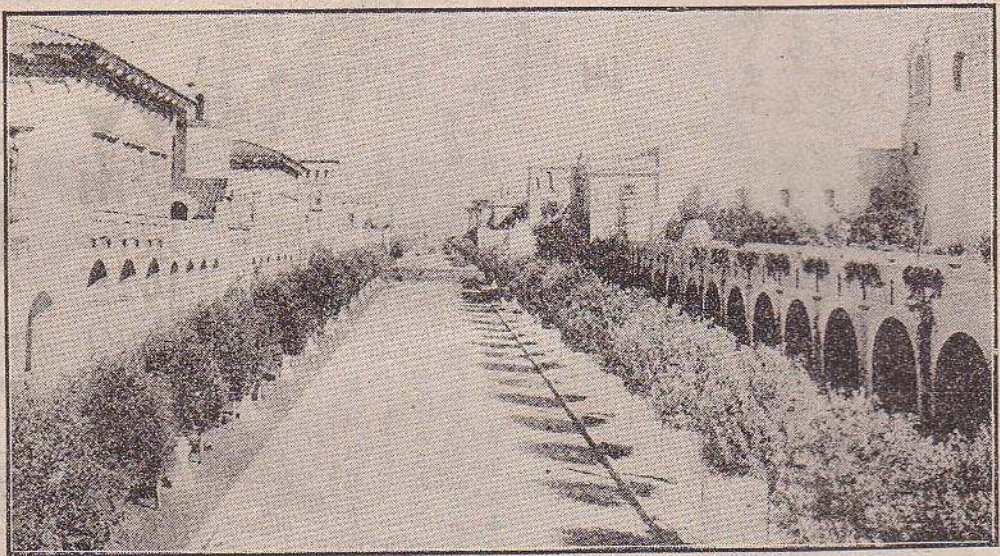
て居た金二圓を以て歸郷せんと企
た事が發覺し二人の仲間を欺れて
山王下に連れ出され仲間の秘密を
知つて居る者の變心と絶叫して制
裁を加ゆると突然に頭部を打たれ
抵抗したが遂に打倒された云々又
其二人の惡友は魯智深、武松と綽
名のある自由黨中著名の惡漢で他
人を負傷せしめたる事本年に入り
て六人殆んど毎日喧嘩口論を企て
て酒食の料を食ふ四國産れの壯士
である自由黨の本部では大抵月に
八圓から十圓内外の手當を遣つて
居る世に持て餘された暴漢である
との事である
庵主は田舎者の初耳に之を聞いて忌
々しく溜すソナ奴が自由黨だの
有志家だのと云ふて天下の政治の是
非を論ずるとは實に沙汰の限りであ
る殊に自由黨の本部で月給を遣つて
之を使用するなどに至つては言語同
斷であると單純正直の庵主には強く
痾癢を起したのである夫から其の藤
田に段々説得して眞人間になるかと
深更まで責付けたら後には涙を滴し
てドウカ人間にして呉れ人間になる
と誓言するから是に於て庵主は彼が
郷里までの旅費を與へ其翌朝新橋ま
で送つて其午後横濱發の神戸行の
兵庫丸と云ふ船に乗る事にして一先
づ其事は片付いた處が其晩の九時頃
庵主が外出から歸つて來たら乙衛が
來て待つて居た庵主は山岡先生に一

すお目に掛りたいと云ふて主家に行
たら先生は日暮より米田虎雄殿の處
に行かれたとの事だ大分腹も減らし
て居たから茶漬を喰ふと自分の部屋
にて乙衛に一口二口物を云ひつゝ膳
部を出して飯を食はんとする折柄表
に人が叮嚀に案内を呼ぶ聲がするか
ら乙衛が出たら庵主の在宅を見ると
其儘バラ／＼つと八人の壯士が飛込
んで來て直ぐに乙衛を打倒して庵主
はハツと思ふと同時にランプを吹消
し側の膳部と飯櫃とを投付部屋の隅
にある二本の木刀を取つて立向ふた
丁度先生の處の門弟達は其日に何處
かに擊劍の會が有るとかて皆外出
の留守故全く助勢の人は一人もない
庵主は他に恨を受ける覺へもなく何
か外の人に對する人違ひではないか
とも思ふて居た其中に誰となく藤田
は居るのかとの聲が聞へたからハ、
ア之は的きり昨夜の山王下の奴が庵
主の歸へるのを尾行して見定め今夜
復讐に來たのだなと思ひ此爲めに先
生の家に傷を付けては濟ぬからと直
ぐに外に逃げ出し誘き出して闘ふの
外ないと決心し出ふよとは思へど眞
暗の處で狭い入口に七八人の壯士が
各得物を持つて立騒いで居るから一
方口の入口を出る事も出來ず乙衛の
身上も氣遣ひと思ふ中何かワアツと
云ふ聲がすると同時に闘争が初つた
夫は乙衛が初め打倒されはしたもの
元々柔術の達人だから機會を得て

刃起きて闘争を初めたのである庵主
は其機に乗じてワツト喊いて飛出し
木刀を以て打拂ひつゝ内を駆出て夫
にて漸と外に出て追掛けて來る者初
めは三人斗り後には五人其後には乙
衛が門の潜り口を小楯にして闘つて
居た折柄背月の落た殘光に透かし見
れば儘かに乙衛を入れて八人位であ
つた庵主は成丈け山岡邸を離れた處
で闘争をしたい考故又逃出して紀伊
國阪の方へと走つた彼等は四人斗り
追駈けて來たから能き程の處にてサ
ア來い來れと決心をした一體此大勢
と闘ふのは一人の方が割りに都合の
好い事もあるものである夫は第一體
方の續くと云ふ事が土臺で永く奮闘
する中に弱い奴の出遮張る奴を端か
ら小手なり面なりを打つて片付けて
行くのと割に勝を制するものである殊
に向ふは多勢を頼んで居る此方は一
人で氣構へと決心が違ふ之に反して
一段上の人と一騎打をするドウし
ても終局責め潰される事になる此
闘争の相手は皆胡魯多の様な亂暴書
生計りではあるが其中に一人途方も
ない強い奴があつてヌツト庵主の前
に出て來て他の者を皆追退けて乙衛
の方に掛らせ此奴一人にて一騎打に
のの方に掛つて來た二尺餘りの木
庵主の方に掛つて來たがサア中々手
刀を持つて構へて來たがサア中々手
易く動かない庵主も是はと思ふと同
時に何様先刻より氣が焦て居るし輕
蔑心も有つた處故でもあつたるふが

アつと打込て来た一刀の鋭さ庵主が受よふとして出した左小手は折れて飛だかと思ふ程打たれた直ぐに突込で来たのを外をふとするとアノ阪側の溝にアワヤ真逆様に落込んだかと思ふ一刹那道の傍に最前から袴掛一本のストラツキを杖にして車夫を側に立たせて見物して居た山岡先生は其敵の男の出鼻をエイと云ふ掛聲と共に暗の中より彼の右小手を撃た其掛聲で庵主の崩れた體はズント縮ると同時に危く踏み止る事が出来一方彼の敵は名しあふ天下第一人の劍客眞影無念流の巨星と呼ばれたる山岡老先生に吸付られるよふな良き息の間にストラツキで小手を撃たれたのであるから脊髄から脳天に迄も響いたものと見へ持つたる木太刀をガリと落とすと其儘ヒロ／＼と三間計り後の方に漂ひパタンと倒れた庵主は其息と同時に飛付いて打据へて遣ふと駈出す鼻を又先生に馬鹿ツと一聲叱られると同時に膝頭をボンと打たれた庵主は俯伏にピタンと倒つた其息の良い事と間の良い事と云つたら庵主三十有餘年の今日まで片時も忘れぬ庵主は十四五歳の時柔術 庄 林流の谷村先生に投付けられたのも丁度同じ息と聞てあつた粘り氣のある大きじ柔かな手術で打倒された其味のお甘しさと云ふたらない庵主は今生の中に此谷村先生に投られた味と半年計り食や食はず居る處に親切な友

五人前食ふた時の味と此山岡先生に撃たれた味の三ツ丈けは其お甘しさが丁度同じ事で一生死まで忘却の出



敷石に照返す日や蝉時雨

感ずる故に忘れられぬのである夫て自分の藝能も其感が附廻るから上達もするのである此は決して武藝斗りてなく他の學問でも何の藝術でも同じ事て味が分る事にさへなれば上達する基礎が出来来るのである後世青年の爲めに一寸書いて置く

來ぬ味である此は此道の飯を食ふた者でなければ分らぬ一藝に立勝つた大先生に撃たれた味は痛い所ではない丁度鰻を食ふた味と同じ味が體に

とはアノ事だアノ小僧は小器用な修業をした奴じや貴様のよふな馬鹿力を出す劍術は仁王の様な大力でも終局の負け坊主になる事は初めからチ

敷石に照返す日や蝉時雨
夫より庵主は山岡先生のお供をして二三町ある山岡邸の前に急足で來たら乙衛はマダ三人斗りを相手に闘つて居る夫が始め小門の入口を小楯に取り闘争を始めたが此く長時間闘つても一寸も其場を動いては居らぬ又少しの疲労の様子も見へぬ山岡先生は十間斗り手前に又佇立して庵主と共に凝視して居られた暫くして先生が云はれるには「コレ一寸アレを見よアノ小僧の息の良い事をアレ今に三人とも打倒されるぞアノ小僧はアノ小門を小楯に取つて七分其身を圍ひ體に少しも無理のないよふに休ませて居る相手の三人は打たんと焦つて居る虚を以て實を打つ

ヤンと極つた者じや負ける爲めの修業なら止めよ明日から心を入れ替へて修業せよ俺も其積て稽古をして遣る又アノ小僧も教へて遣るから来るよふに云へ」と散々に叱られ庵主は九で一文の直打もなく形なしに叱られ弟分と思ふて居る乙衛は無暗に譽られ庵主が多年優勢に誇つた高慢の城壁は此時ガラ／＼と壊はれて仕舞つた心魂に徹して後悔の心が起つた其中に乙衛はワツと喊いて飛掛つて三人の中に撃込んだが一人は打倒され二人は各横髪と天窓を打たれホウ／＼になつて逃げ出した夫から先生のお供をして乙衛の處に近付先生に引會はせたら先生は「ムウ乙衛と云ふか此方に來い」と云ふて二人共に洗足をして先生の居間に往き色々教訓を受けて共に部屋に引下つたら時計がチンと一時を打つた。(續)

唐人の寢言 (其日庵主人作) 天籟手記

- △相公厭々忙愁一妖壁
- 高軒肥馬閃銀鞭 遙載相公入暮煙 詎識墨江鷗鷺外 柳陰深處有遺賢
- 香國曰 巖子陵不逢物色却多幸

△驟雨即事

- 漁浦風濤蟹氣衝 雲低奇冷透輕衫 忽看驟雨劃江到 嶺外斜陽明半帆
- 香國曰 試插之于真山民集中恐不能辨